

令和5～6年度 施設提案型モデル事業 「最終報告書」

施設名 金沢星稜大学附属星稜泉野幼稚園

【取り組みのテーマ】

・交流保育実践を通して、保育の多様なあり方を探る
—具体的には、環境の異なる遠隔地の2園が相互訪問に加えオンラインを含めた継続的な交流を行う。回を重ねることで仲間意識を育みながら相互の違いや良さに気づき、子どもたちのみならず保育者の成長にもつながる新たな交流事業を提言する。

【2年間の主な取り組み内容】

【令和5年度活動内容・経過】

(1) 職員合同研修会の実施（2回）

① 山中保育園・星稜泉野幼稚園 合同職員研修会（8月）

【テーマ】

交流保育実践の留意点と課題 ～小松市認定こども園・保育所の交流実践を踏まえて～

【講師】

神戸親和大学教授 福井逸子氏

元北陸学院大学准教授 山森泉氏

【内容】

- ・「交流」とは？
- ・多様な視点で「継続的」に見る ⇒ 2園の保育者の目線で見るとは？
- ・交流実践の記録の活用
- ・2年間の実践のまとめ方
- ・新たな課題にどう取り組むか？

【思い・気づき・学び】

- ・その子なりの楽しみ方、かかわり方があり、その子らしさをこわさないでできる交流が大切だと感じた。
- ・自分で認識している範囲には限界があり、異なる環境での子どもの姿や保育者のあり方を知ることで、視野が広がり、子どもに対する視点も多様になることを学んだ。
- ・共通書式を用いた記録は、誰もが読んで場面を把握しやすく、その場面の子ども理解が共有できることを知った。

② 山中保育園・星稜泉野幼稚園 合同職員研修会（３月）

【テーマ】

交流保育実践の留意点と課題 ～実践の振り返りと記録について～

【講師】

神戸親和大学教授 福井逸子氏

元北陸学院大学准教授 山森泉氏

【内容】

- ・実践の振り返り
- ・実践の何を記録するか

【思い・気づき・学び】

- ・日々の保育で多忙な中であっても、園の業務だからやらねばならないという義務感から脱却して、「やってみようかな」「こんなことをやってみたいな」という主体的な取り組み姿勢や気持ちを持ちたいと思った。
- ・両園の子どもたちを保育者が先導して一緒に遊ばせようとするのではなく、新しい環境で自分も一緒に楽しもうという視点の切り替えを持つことが、大切だと学んだ。

(2) 対面交流保育（２回）

① 山中鶴仙溪・さくら公園（８月）

※後日、はがきでの交流（子どもからの提案）

【内容】

- ・４グループ（山中保育園・星稜泉野幼稚園混合グループ）に分かれて、川沿いの散策やネイチャーゲームをしたあとで、お弁当を一緒に食べた。

【子どもの姿・保育者の気づきや思い】

- ・山中保育園の子が軽くポンポンと渡っていた小川を、本園の子は数人で見ているだけだったところ、保育者の指示がなくても山中保育園の子がさっと手を差し伸べて渡らせてあげていた。
- ・本園の子どもたちには不慣れな飛び石のところでも、渡れない子がいると山中保育園の子は待つてあげていた。
- ・同じグループで自己紹介しているときに、同じ名前の子がいることで、本人同士も他の子たちも少し緊張がほぐれ、ちょっとしたきっかけで親近感がわいたのではないかな。
- ・交流とは、対面で一緒に過ごし、行動することだけではなく、気持ちのキャッチボールをすることでもあったと感じた。

②星稜泉野幼稚園（11月）

【内容】

- ・園内探検やパラバルーン、帽子取りゲームを行い、グループごとに座って一緒に昼食を食べた。

【子どもの姿・保育者の気づきや思い】

- ・前回の交流を通してお互いを覚えている子どもたくさんおり、また会えたことが嬉しくてすぐに一緒に遊び始めていた。
- ・自分の園を紹介したいという思いから、ふだんはおとなしいタイプの子も自分から積極的に山中保育園の子に声をかけており、会話も弾み、自然に手をつなぐ姿も見られた。
- ・ラキューは両園にあるため、お互いに興味があり、作品を見て刺激を受けていたように感じた。

【令和5年度の気付き、学び、令和6年度に向けてのポイント】

両園の子どもたちを保育者が一緒に遊ばせようとするのではなく、新しい環境で自分も一緒に楽しもう！という視点の切り替えを持つことで、交流保育を負担と感じず保育者自身が保育のヒントを得たり、楽しみを見いだせることにつながると実感した。

次年度に向けて、交流機会を増やす一方で日程調整や移動時間・費用の軽減を考慮し、対面交流に加えオンラインを含めた遠隔地同士の交流を取り入れることで、子どもたちの育ちを伸長したい。

【令和6年度活動内容・経過】

(1)職員合同研修会の実施（2回）

① 山中保育園・星稜泉野幼稚園 合同職員研修会（8月）

【テーマ】

交流保育実践の留意点と課題 ～Zoomでの交流から得られる気づきと拡がり～

【講師】

神戸親和大学教授 福井逸子氏

元北陸学院大学准教授 山森泉氏

【内容】

- ・交流保育の多様なあり方
- ・保育者の気づき・学びと他者との共有による拡がりへ
- ・安全対策についての共通認識（園外での交流活動、特に中間地点での交流時）

【思い】

- ・ 中間地点での対面だけでなく、時間差での訪問・体験・発見や感想の伝えあいも交流保育の新しい形だと感じた。
- ・ Zoom でのやり取りの際、音声の聞き取りやすさ、話すタイミングに関する課題として「視覚的に表示する共通のカード」(例：声が聞こえません)を取り入れたいと思った。
- ・ 安全対策についての共通認識として自園の避難マニュアルを見直すだけでなく、中間地点での交流時の避難マニュアルの作成が必要（別紙１・２）だと感じた。

② 教育・保育公開研修会（２月）

【テーマ】

Zoom での交流から得られる気づきと拡がり

【講師】

元北陸学院大学准教授 山森泉氏

【内容】

- ・ 多様な交流の実際
- ・ Zoom での交流による子どもの姿の変化＜気づき＞
- ・ 保育者の学びと協働性＜拡がり＞
- ・ 語り合いと共有

(2) 対面交流保育（１回）

① 能美市いしかわ動物園（山中保育園と星稜泉野幼稚園の中間地点）（１０月）

【内容】

４グループ（山中保育園・星稜泉野幼稚園合同グループ）に分かれて園内を回り、お弁当を一緒に食べた。

【子どもの姿・保育者の気づきや思い】

- ・ グループの担当保育者の判断でペアになる子を先に決めて歩く２グループ、自由に歩いていく２グループがあった。
- ・ 本園の保育者のグループは、子ども同士の距離が自然に近くなることを願い子ども達の思いを尊重して自由に回った。
- ・ 途中から、子ども達自身が気になった子に近づいたり、手をつなぐタイミングを計ったり、気持ちが合う会話を重ねたりといった様子が見られた。
- ・ 一緒に過ごす中で、会話する内容に共感したり、一緒なことを発見したり、相手の面白いところを見つけたり、一緒にいて楽しいと感じたり、少しずつ心を開いていったりなど、心の中で色々な反応があったのではないかと思う。

- ・交流とは、外形的なこと（一緒に何かをするといった目に見える）ではなく、心理的な距離感（関わる中で双方の気持ちが動いて近くなる）ということではないかという理解（実感）に変わってきた。
- ・動物を見ることだけで終わらず、予想以上に子ども同士の自然な交流の姿が見られたのは、事前に Zoom での交流を経験していた効果があると思う。



(3)Zoom 交流（職員 3 回、園児 9 回）

<職員>

顔合わせ（6 月）、対面交流保育について（9 月）、打合せ（2 月）

<園児>

両園年長児で Zoom（対面交流後は Open Zoom）

【子どもの姿・保育者の気づきや思い】

<対面交流前の Zoom>

- ・7 月初めの Zoom 交流では、全員がその場に参加すべき（参加しないといけない）という思いが強くあったため、クラスごとに聞きたいことを考え、代表の子が質問をするという形で保育者が前面に出て進めていた。しかし、そのような交流の仕方（保育者がこうなってほしいという環境を作って保育者主導で進めていくこと）は、本当の意味の交流なのか疑問が職員間で生じた。
- ・対面交流実施のための 10 月 Zoom 交流では、4 つのグループごとに動物園を回るため、同じグループの子との顔合わせをした。恥ずかしがって自分の名前を小さな声で話す子が多かったが、動物園に行く前に一緒に回るメンバーを知ることによって少し見通しを持て安心できたと思う。

<対面交流後の Zoom>

- ・対面交流後、Zoom のためのパソコンを設置し、興味を持って話しかける子とそれを聞いて興味を持って聞く子がつながることが面白いのではないかと考え、OpenZoom を始めた。

- ・11月 OpenZoom 交流では、始まる前、パソコンを見つけた子が、興味を持って集まってきたが、いざつなぐと黙ってしまったりその場を離れたりする様子が見られた。中には、気にはなっているが興味がない風を装いながらチラチラ見ている子もいた。一方、山中保育園の子どもたちは、自然な感じで話をしてくれた。恥ずかしがる自園の子どもたちの様子を見ているうちに「山中の子は～泉野の子は～ではなく、この子の今の思いはこうなんだな」とありのままを受け止めるべきだったと反省した。人とつながっていく過程は、一人ひとり違うのに最初からすぐに仲良くなって欲しい、そんな姿が見たいと保育者の私たちが心のどこかで思っていたことに気づかされた。
- ・12月前半 OpenZoom 交流では、興味を持っている子は、フロアに来て画面に向かって「おはよう」とあいさつを交わしたりしていた。その様子を後ろから見ている子に保育者が来る？と声をかけるとさっと保育室に戻ってしまった。あとで振り返ると保育者の一言は余計だったのではないか。日頃の遊びの姿でも保育者に見られている、カメラを保育者が持っているということに敏感なところがある子にとって画面の前に立つことにはかなり緊張するのではないか、気になって見に来ている姿を大切にしたらよかったのではないかと反省した。
- ・この回の Zoom では、園庭で拾った葉っぱを見せ合ったり太鼓をしているという話題が出たりした。山中の子どもたちが太鼓をしに行くと言った時に「えー、私たちも太鼓しているよね」と自然に感情を表出しており、同じ遊び、同じ活動をしているという共通点を感じ、素直な反応が出たのではないかなと思う。



- ・12月後半 OpenZoom 交流では、山中保育園の子が画面の奥の方で遊んでいる姿を見て「〇〇して遊んでいる」「何作っているのかな？」と友達どうしで話題にしている姿が見られた。
- ・この回では、日頃、自分から発言することが少なく友達が話している様子をにこにこして見ている子が、その友達がいない時に自分から山中保育園の子に話しかけていたり自分から隣の子に聞いてみようと思ったり一緒に聞いたりする姿が見られた。自分だけで行動できたことは本人の自信にも繋がったのではないかなと思う。もし対面で会ったとしても同じように話し出せていただろうか。対面では話しかけを躊躇してしまう子にと

って、Zoom のパソコンを媒介にしたことであまり緊張しないで話しやすい環境になったのではないかと思います。

- ・子ども同士がやり取りをしていない時間帯もあるが、直接は交流していないと保育者が思いがちな場面でも後から何をしていたのか話を聞いてみると子どもたちは見ていて繋がりを感じていると思われるケースがあった。子どもたちの認識から直接会話している場面以外にもパソコンが繋がっている間は、同じ場所で遊んでいると捉えることができ、このようなケースを含めて交流していると考えてよいのではないかな。
- ・今までは、全体的に見せ合ったり話したりすることが交流の成果であると限定的な捉え方をしていたのではないかな。Zoom は、その子の心がやりたくなったり一歩踏み出したりしたくなるきっかけになるツールなのではないかなと実感した。
- ・1月 OpenZoom では、パソコンのセッティングをしている時に、子どもたちから編み物、郵便屋さん、積み木など遊びのコーナーを見せたいという声が聞かれた。これまで回数を積み重ねてきたことで繋がることを楽しみにし、自分が映る姿よりも何を見てもらおうかという思いが大きくなったのではないかなと感じた。Zoom 中は、今自分が夢中になっている編み物を見せたりラキューで作ったものを見せたりというやり取りを楽しむ子や後方でその様子を見ている子がいた。終了後に Zoom のことを共有する時間をもつと「後ろで見ていたから知っている」という声もあり、直接話したりカメラに映ったりしていなくても興味を持って友達の姿や山中保育園の子どもたちの姿を見ていたことがわかった。会話するというかわりだけでなく「見る・聞く・保育室の空間を見せる・相手のいる空間を見る」という新たな繋がり方も発見することができた。



- ・2月上旬 OpenZoom では、前回までの子どもたちの姿（興味をもってもすぐに離れていく様子）を見てパソコンの場所をかえてみることにし保育室の中にパソコンを置いた。子どもたちの遊んでいるどの場所に置こうか、高さはどうしようか、どの向きにしたらよいのか。保育者の中で交流のとらえ方（認識）が変わってきているがゆえの検討結果である反面、山中の子たちとリアルタイムで見えていることや聞いたこと、話したことを受けこちらも返すといったキャッチボール的なやり取りが公開保育の時までに見られるようになって欲しい、安心したいという保育者の本音の気持ちもあった。

- ・子どもたちが自分で遊びたい「もの・人・空間」を選ぶことのできる環境構成の中の一つに山中保育園の子どもたちとつながっているパソコンがある状況、保育者が誘導するのではなく生活・遊びの空間の中で子どもたちが自ら選ぶ、そしてその子なりにいろいろなことを得ていくのではないかという点について、保育者間での認識が以前に比べて深まってきた。保育環境の中に山中保育園と同じものや同じくらい興味がある遊び・素材があると今以上にお互いの心が繋がるきっかけになるかもしれないと考え、紙コップでの遊びを着想した。
- ・2月中旬 OpenZoom では、Zoom が始まると、紙コップが山中保育園にもあることに子どもが気づき、自分たちが使っている紙コップを持ってきて自分たちが最近夢中になっている遊びを見せ始めた。そのうちに山中保育園の子どもが紙コップタワーを作っていることに気づき自分たちでもすぐに作り始めた。今までの Zoom 交流時には、普段の自分が出せずに別の場所に行ってしまう子が、今回はパソコンの前で友達と紙コップタワーを作って遊ぶ姿が見られた。共通の遊びで楽しむことができるようになったのだと、子どもたちの姿を見て感じた。



【令和5～6年度の活動の成果・考察】

- ・2023年度は、Zoom の接続環境により相互訪問による対面交流限定となったが、2024年度は、Zoom での交流が主で、対面交流は1回だった。
- ・初めての Zoom では、全員が経験しなくてはいけないと思う気持ちが保育者にあり、クラスごとに聞きたいことを考え、代表の子が質問をするという形で保育者が前面に出て進めたりしたが、子ども同士で自然にやりとりができたらの思いがあった。一方で交流の回数を重ねるうちに、保育者がこうなってほしいと思う環境を作って保育者が主導して進めていくことが本当の意味の交流なのだろうかという疑問に思うようになった。
- ・今年度の対面交流は両園の中間地点で行ったが、対面交流に備え、両園共通で活用する緊急時のマニュアルを作成した。(別紙参照)
- ・対面交流後、興味を持って話しかける子とそれを聞いて興味を持って聞く子が繋がるということが面白いのではないかと考え、新たな試みとして OpenZoom を始めた。OpenZoom

を継続していくうちに違和感なく接している両園の子ども達の姿を見て、離れていても山中保育園の子どもたちの空間と自分たちのいる空間が繋がったような感覚があるのではないかと思うようになった。

- ・大きな枠の環境構成の中で子どもたちが自分から選択して遊ぶ。その中の一つに他園とつながるツール（Zoomでの交流）もある。そこで繋がりたいと思う気持ち、楽しい、面白いなど同じ気持ちを感じる、一緒にやってみたい、遊びたいという気持ちや行動が「交流」ということなのだと思うようになった。交流とは子ども達が「それぞれの主体性をもって対話すること」なのかもしれないと考える。

【公開保育について】

- ・以前から一緒にけん玉バトルをしたいと話していたこと、山中保育園にも同じ紙コップがあることを知っているので離れていても Zoom を媒介にして一緒に遊ぶ楽しさを感じられたら、繋がれたらいいと考え、当日を迎えた。数日前から、年中組の子どもたちも紙コップに興味を持って遊んでいるためそのまま Zoom にも参加するのではと予想し、特に年長・年中などの制限はしないでした。
- ・当日は、フロアで紙コップを使ってお城づくりが始まり、出してあった紙コップを全部使ったが高さがあまりない状態になって、その場が困った雰囲気になる。その様子を見ていた保育者が、「紙コップのかわりになるものないかな」と言葉をかける。するとある子が「テープの芯とかがいいんじゃない」と言って材料の部屋へテープの芯を取りに行く。それでもまだ思ったより高くないとまた材料の部屋に行き、今度は牛乳パックを持ってくる。途中で一部倒れてしまうが、子どもたちは腹を立てる様子もなく積み始める。だんだんと興味を持って一緒に遊ぶ子が増えてきた。人数が増えてきたからか、お城の中に入るのは5人までというルールができる。保育者が Zoom 中のパソコンの画面の角度を変え、子どもたちが作ったお城を映す。山中の子どもたちは、興味がない様子。パソコンに向かって話しかける子が出てくるが反応はなく、「きこえません」のカードを出して提示してみるが反応はなくそのまま終わった。
- ・前回、山中保育園の子どもたちの紙コップタワーを見て、本園の子どもたちも紙コップを積むという遊びを楽しむようになっていた。パソコンのところに来た子が山中の子に話しかけたのは、繋がりたいと考えていたからと思われる。自分たちで考えて作った紙コップのお城のことを伝えたかったようだが、もし山中の子が気づいて会話ができたらどんな展開になっていただろうか。今度は山中の子たちが泉野の子たちの真似をして遊びが広がるかもしれない。互いにしていることが面白いことだと分かり合えるのではないか。（担任）

《参加者所感》

- ・これからの保育では Zoom などの交流の仕方があれば自分たちの知らない場所や慣習を知ることができると思った。また、ネットを使いこなしていくグローバルな人材の育成としても役立つのかもしれないと感じた。
- ・研究内容の様子が、公開保育の中でも直接見ることができ、とても興味深い内容だった。OpenZoom を通して、遊びの空間がさらにひろがっており、これまでの 2 園の交流の様子が日々の生活にも繋がっている姿を感じられた。公開保育を通し、子ども達との関わり方・遊びの展開・環境設定など私自身の保育観を見直すきっかけとなった。山森先生の講義から『即効性と遅効性』の言葉が心に残った。翌日すぐに変わるものではなく、じわじわと日々の保育で気づき変わっていく…これからも日々を見つめ直しながら保育に向き合っていきたいと思う。
- ・子ども理解と子どもが集中して遊べる環境が大切だと思った。
- ・公開保育はずっと室内だったが、飽きずに遊びこめる環境でありすごく学びになった。私たちの園は、屋外で遊ぶことが多いが、天候によっては室内での時間もあるため「子どもたちの好きな遊びは何か」に改めて目を向けて、その遊びを広げられるような環境設定や遊びこめるような環境づくりを意識していきたいと思った。
- ・どのような内容なのだろうと思いながら参加させていただいた。Zoom での交流から得られる気づきからは、子ども達のまわりへの関りがより見えてきて、子ども達がどのように感じ、関わっているかを知ることができた。また、星稜の先生方の考察がわかりやすく、自分自身の視点の反省や子どもの姿のとらえ方もとても学びになった。園内の遊びも充実しており、ごっこ遊びや子どもの興味から遊びを広げて行事に繋げていく過程もとても参考になった。
- ・Zoom での交流は、子ども達には、難しいのではと思っていたが、保育者の毎回の振り返りが活かされていて自然な形で繋がっていたことがとても参考になった。いろいろな活動を通して保育者が見直したり、学んだりしていくことでよりよい保育に繋がっていくのだと感じた。また、保育を見せていただくことで、環境はもちろん保育者のかかわりが参考になることが多かったので自分の保育を見直して明日からの保育に活かしていきたいと思った。

【今後に向けての取り組み】

- ・交流保育における気づき・悩みをどう保育に活かしていくか。2 園の保育者間で、実践前、実践後でポイントを絞った意見交換が必要だと思う。両園でもその必要性を感じているので、その時間の確保（予め設定しておくこと）が課題の一つになる。
- ・交流保育開始当初は、どの保育者も実施時の準備対応のみで余裕がなかったが、回を重ねることで、保育者同士も信頼感を持ち、保育についての課題を共有していくことができるまでになった。自園単独では気づかない保育の課題、「その子」への対応の仕

方など、保育の視野を広げていくきっかけの一つになりうる。子どもたちが打ち解けるまでに時間がかかったのと同様、時間をかけて実施してきた交流保育の都度課題を共有することで、保育者も相互に学び合う姿勢を持つことができるようになった。保育者の人間関係や保育の視点の拡がりをこれからも継続していきたい。

【所感】

- ・山中保育園との時間を重ねていくうちに「交流って何？」という点の理解について、保育者の気持ちの中で変化が見られた。継続しているからこそその気持ちの変化・深化なのだと思う。
- ・交流実施後、両園共通書式を用いた記録を作成し、両園で見合うことにより成果の確認、課題、改善につなげていくことになるが、記録を作成した後の両園での振り返りが不十分だったと感じた。工夫次第では、時間を作ることができたのではないかと思う
- ・保育者主導の交流保育では分からなかった子どもの思いや興味・関心が、特に Zoom での交流を通して見えてきた点、予想していなかったプラス面だと言える。
- ・交流保育は、子どもたちだけではなく、保育者にも気づきと学びをはじめとする出会いや様々な発見があり、通常の保育（自園単独での保育や保育者の学び）では得られにくい新しいスタイルの学びにつながる。対面交流だけに限定すると日時・場所・費用・などの制約があり、年に複数回の実施は現実的に難しいが、Zoom での交流はそのような諸課題・制約を気にせずに行うことができる点を高く評価できる。石川県のように降雨・降雪が多い地域でも、また昨今の異常気象と言われるような酷暑・豪雨などの折でも実施可能な交流手段として、継続していく意義は大きい。

《山中保育園担任より》

- ・年長組同士の交流、Zoom では子どもたちの賑やかな声、音源・画面がフリーズするなどの改善など多々あったと思いましたが、交流の場を体験できて子どもたちにとって良かったと思います。2 年間にわたり様々な交流をありがとうございました。貴重な体験をさせて頂きました。

最後に：「令和 5～6 年度 施設提案型モデル事業」に採択された当初から、子ども理解をより深め自園の保育観を見直す機会にしたいと思って取り組んでいましたが、1 年目は途中経過ということもあり、なかなか成果を実感するまでには至りませんでした。けれども、両園で実施後の課題や改善案を出し合いながら進めていく中で、2 園の保育者が協働で保育することのプラス面や普段見えていなかった子どもの思いに気づく機会があるなど、次第に成果を実感できるようになってきました。

今報告書をまとめながら本事業を振り返ると、やはり 2 年間継続して取り組むことで初めて得られる気づき・学びがあったことを実感しております。

このような機会を与えてくださり適宜サポートしてくださいました金沢市こども未来局
幼児教育センターの皆様へ、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。